



卓上四季

「打ち揚ぐるボールは高く雲に入りて又落ち来る人の手の中に」。野球をこよなく愛した正岡子規が明治31年（1898年）に発表した「ベースボールの歌」9首のうちの一つである▼その9年前の出会いを、俳句の弟子、河東碧梧桐が回想記に記している。「当時東京に出ていた兄から、ベースボールという面白い遊びを、帰省した正岡に聞け、球とバットを依托したから」と言つて来た。子規と私とを親しく結びつけたものは、偶然にも詩でも文学でもない野球であったのだ▼こうして子規は郷里の松山に野球を伝えたとされる。当時、碧梧桐は旧制中学生だったから、松山の高校野球の始まりとも言えよう▼新型コロナウィルスの感染拡大を受け、多くの高校スポーツ大会と同様、選抜野球大会も中止に追い込まれた。世界保健機関が世界的大流行を宣言する事態とはいえ、白樺、帶農をはじめとした球児や、他の競技の選手にとって一度きりの春だ。やりきれまい▼子規が野球を楽しんだ時間は短い。ベースボールの歌を詠んだ頃は、早すぎる死を4年後に控え、脊椎カリエスで身体の自由を失いつつあった。「春風やまりを投げたき草の原」の名高い句のように、春の野に球を追う自分を夢見たろう▼だが、「せめては一時間なりとも苦痛なく安らかに臥し得ば如何に嬉しからん」という悲惨な状況でも、決して挑戦を諦めない人だった。

2020・3・13

2020年3月13日（金）朝刊 全道遅版 総合 1P

- ①筆者は、病に侵されながらも野球を楽しんだ正岡子規をどんな人だと述べていますか。本文中から11字で書き抜きなさい。

- ②「春風やまりを投げたき草の原」の季語と切れ字を書きなさい。

季語：

切れ字：